

地域の開業医がこのような発達不全にどのような対応をしているのか

浜野 美幸

千葉歯科医院

はじめに子供を取り巻く環境の変化から口腔機能に問題点がある小児の増加が懸念されていますが、本人・保護者の自覚がないことも散見します。一方では「よく噛まない」「言葉が不明瞭」など「口腔機能発達不全」が一因として考えられる食事やコミュニケーションの問題に悩んでいる人が少なくないことも分かっています。地域の開業医は、この疾患を早期に発見し、適切に対処して改善する役割と共に、悩みの相談窓口としての機能を果たすことが求められていると考えます。早期発見の意義公的な歯科健診や一般診療は、当疾患を早期発見できる機会であり、特に定期検診は継続的に関わるため指導、管理の確実性も高く、かかりつけ医の存在意味は大きいと思います。小児期は歯列咬合、顎顔面の成長発達期にあり、それを障害する因子は、早期発見して改善し正しい形態に導くことが大切です。歯は周囲の筋肉の均衡がとれた場所に配置し歯列を形成します。筋力の均衡が崩れると歯列咬合は悪化し骨格的な顎顔面変形をきたすことがあります。その事はあまり周知されていない様です。つまり日常的に筋のバランスを崩す口腔習癖（口ポカン、唇をかむ癖、誤った嚥下等）、口呼吸、悪い姿勢に対して、本人や保護者に気づきを促し、適切な対応することは意義があると考えます。指導の実際「口腔機能発達不全」が疑われた場合は、日本歯科医学会発行の「口腔機能評価マニュアル」(www.jads.jp/date/20180301manual.pdf) に則り診査、評価、指導を行います。特に疾患の自覚がない場合には、医療面接での「問いかけ」や日常生活のビデオ撮影を依頼するなど工夫が大切です。口腔機能は「食べる」ことを通して小児が学習し、成長と共に発達しますので、指導の基本は、「正しく食べる」ことの再学習により口腔周囲筋をバランスよく鍛えることとなります。予防のために人生100年時代を迎えた今、形態・機能的に健全な口腔は、栄養摂取のみならず、歩行時の体の安定など、一生にわたる健康を左右し、QOL向上の大きな役目を担っています。地域の開業医は、学校等の健康教育を通して正しい摂食嚥下、鼻呼吸が健康に寄与することを伝えるのも役目です。さらに小児の成育環境から考えると、家庭以外の場で学ぶことも多く、保育・教育関係者など他業種の方々に対し、口腔機能育成の情報を提供、連携して「口腔機能発達不全」を予防することは、親子支援に繋がると考えています。